

臺灣における若年層の「母語」観について

——國語・臺灣語の使用状況とその意識に関する調査から——

小 島 正 弘

1. はじめに

筆者は1994年6月から臺灣南部の大學及び専科學校⁽¹⁾で日本語を教えている。臺灣では現在民主化運動が盛んに進められており、現地に住んでいるとその熱氣がひしひしと伝わってくる。

さてその民主化運動の強調點のひとつとして、これまで貶められてきた臺灣語の復權ということが挙げられている。戦後の長期間にわたる國民黨政府の強力な國語⁽²⁾政策によって、これまで臺灣語は社會的に差別されてきた。それに對し臺灣語こそ臺灣人の「母語」であるのだから、國語一邊倒を改め、公の場でも臺灣語を使おうという運動が起こってきたのである。

ところで、筆者は日頃臺灣の學生たちとの付き合いの中で常々疑問に思っていたことがある。彼らは小學生の頃からずっと國語で教育を受け、ごく当たり前のこととして國語を自然に話している。だがそれに反して、臺灣語が自由に使いこなせなくなっているとよく耳にするのである。こうした最近の若者たちがいったい臺灣語の復權ということを本當に望んでいるのだろうか。

本稿はこの疑問から出發した。臺灣の學生たちにアンケート調査を行ない、臺灣の若者たちの日常生活における言語——特に國語と臺灣語——の使用状況と、低くなったと言われる彼らの臺灣語力、及び臺灣語に對する意識を明らかにすることを目的とした。臺灣人の言語使用状況は臺灣の北部と南部とで異なるとよく言われる。また筆者の見たところ、男子學生と女子學生とでもかなり違いがあるようだ。この調査ではこうした點も明らかにしようと努めた。

2. 臺灣における言語状況の概説

2-1 言語による臺灣人の類別

臺灣は約二千萬の人口を有するが、言語的には大きく四種に類別できる。

まず、漢民族の入植が始まる以前から住んでいた「先住民（原住民、山地同胞とも呼ばれる）」である。彼らは九つの部族に細分されるが、その言語は全てマライ・ポリネシア語族に属する。人口は34万人（1992年現在）にすぎず、その半数が山間部に住んでいる。

臺灣の人口の圧倒的多数を占めるのが、17世紀以降、特に清朝の時代に中國大陸から移住してきた人々で「本省人」と呼ばれる。本省人の多数は對岸の福建省から移住してきた人々で、閩南語（即ち臺灣語）を母語としている。また本省人の中には廣東省から移住して来た人々もいる。彼らは客家語を母語とした「客家人」である。

最後に、第二次世界大戦後に中國大陸から移住してきた人々があり、「外省人」と呼ばれる。彼らの出身地は中國大陸の各地にわたるため多数の漢語方言を母語としているが、言語生活の上では主に公用語である國語を使用している。

現在、閩南語を母語とする者は全人口の約75%、客家語を母語とする者は約13%を占めると言われている。そして外省人は全人口の約10%と考えられている。

2-2 戦後の國語政策の状況

臺灣は1945年日本の敗戦によって、中華民國に接收された。臺灣人たちは祖國復歸に歡喜したが、日本人に代わって中國大陸からやって来た國府軍は臺灣にあった豊かな富を次々に略奪し始めた。インフレが進行し、失業者があふれ、腐敗官吏によって社會秩序は悪化した。政治・經濟の實權は全て國民黨官僚の手に握られ、本省人が入り込む餘地はなかった。

また國語の使用が強制され、日本語と方言（臺灣語・客家語など）の使用が禁止された。このことは、本省人と外省人との間に大きな文化的摩擦を引き起こした。戦前五十年間日本の統治下にあった臺灣には、國語の話せる者はほとんどいなかったのである。外省人に對する本省人の反感は高まっていった。

こうした状況下で1947年「二二八事件」⁽³⁾が起こった。國民黨政府による事件

の強引な鎮壓によって、本省人の心には國民黨への恐怖心と外省人への憎しみが刻み込まれた。

1949年共産黨との内戦に敗れた國民黨政府が臺灣に移り、戒嚴令が施行された。國民黨は大陸復興の基地である臺灣に、徹底した「中國化」政策を推し進めた。學校教育では中國の歴史と地理に関する教育が強化され、臺灣の歴史は定全に無視された。臺灣独自の民間藝術や傳統藝能なども輕視された。しかし「中國化」政策のうち最大のものは國語運動の推進である。

國語は學校教育を通じて急速に普及した。學校では臺灣語を話すことが嚴禁され、それを犯すと處罰された。またテレビ・ラジオなどのマスメディアでも、國語を使用することが主流とされ、方言の使用には制限が加えられた。こうした政府による臺灣語の差別化は、人々の心に臺灣語が劣った言語であるという偏見を生じさせ、臺灣語を卑下する意識を植えつけた。

2-3 最近の政治的變化

1986年臺灣初の野黨である民主進歩黨が結成された。その翌年には「二二八事件」の追悼集會も開かれ、また三十八年間續いた戒嚴令が解除された。更にマスコミの自由化によって言論の自由が保障されるようになり、それまで最大のタブーであった「臺灣獨立」も公然と主張できるようになった。

1980年代後半以降のこうした民主化運動は、それまで長い間國民黨に抑壓されていた本省人が自ら政治に參劃していく運動でもあった。そしてこうした時代の流れの中で、それまで蔑視されてきた臺灣独自の文化を再評價する運動が始まった。臺灣の歴史・文學・郷土藝能に関する研究が盛んになり、また臺灣語に對する見直しも行なわれるようになった。

初めは民間から始まったこうした運動も、やがて政府の「本土化」政策によって政府自身が力を入れるようになった。教育面でも歴史の授業で臺灣の歴史を教えることが決定された。また、臺灣語・客家語さらには先住民の言語も學校で教えることが現在計劃されている⁽⁴⁾。

3. 調査方法及び集計方法

調査にあたっては、まずアンケート用紙を作成した。全部で19問から成るが、問1から問13までは若者たちの日常生活における國語・臺灣語の使用状況

に関する質問である。問14と問15は若者たちの臺灣語力についての、問16から問19までは臺灣語に対する意識に関する質問である。

アンケートは臺灣北部（臺北・桃園）及び南部（高雄・臺南）の大學・専科學校十二校の學生を対象に実施した⁽⁵⁾。実施方法としては、筆者の教えている學校については授業の後で時間をとって學生たちに記入してもらった。その他の學校については筆者が知り合いの先生方にお願ひし授業の前後の時間に、或いは宿題として學生たちに配布し記入してもらった。

実施の時期は1995年10月3日から18日までである。回収できた枚数は合計973枚である。學生たちの年齢は主に15歳（五年制専科學校の一年生）から23、4歳（大學四年生）となっている。

集計方法については、まず回収したアンケートをその出身地によって、北部と南部に大別した。それは北部は外省人が多いため國語の使用率が高く、一方南部は土着の本省人が多いため臺灣語の使用率が高いと一般に言われているためである。なお北部と南部の区分については嘉義縣以南を南部とし、雲林縣以北を北部とした⁽⁶⁾。

そして北部と南部に分類したそれぞれを、更に男女別に分類した。従って全部で、北部男子・北部女子・南部男子・南部女子の四つに分類したことになる。アンケートの各質問は、この四分類にしたがって統計をとり、比較し考察を加えた。

なお、アンケート用紙には「本省人、客家人、外省人、先住民」⁽⁷⁾の何れに屬するかを選ばせる項目を設けたが、この問題は人によっては答えにくい問題である。というのはまず第一に、父が外省人で母が本省人であるとか、父が本省人で母が客家人であるとかいう場合である。そういう人の中にはっきり「自分は外省人である」とか、「客家人である」とかいうアイデンティティーを持っている人はいる。しかし、どちらに屬するかと聞かれて答えられないという人も多い。

また、先住民の場合、人によってはあまり自分が先住民であることを言いたくないという人もいる。従ってこの項目は書きたくない人は書かなくてもよいということにし、集計・分析の上でもこれによって統計をとることはせず、参考にとどめた。

4. 調査結果

4-1 若者たちの日常生活における國語・臺灣語の使用状況

4-1-1 家庭内で

表1：両親と何語で話すか？（問1・問2）⁽⁸⁾ ※以下に掲げる表の数字の単位は全て「人」

	北男	北女	南男	南女
1 父母とも國語で話す	50	117	31	46
2 父母とも臺灣語で話す	102	43	165	93
3 父母とも國、臺兩言語で話す	38	34	44	71
4 父と母とで國、臺兩言語を使い分けしている ⁽⁹⁾	16	19	22	38
5 客家語 ⁽¹⁰⁾	14	10	8	5
6 その他	1	2	2	2
〈合計〉	221	225	272	255

表2：祖父母と何語で話すか？（問3）⁽¹¹⁾

	北男	北女	南男	南女
國語	20	35	25	15
臺灣語	155	145	218	219
國臺兩方	11	7	5	3
客家語	17	18	5	1
その他 ⁽¹²⁾	18	20	19	17
〈合計〉	221	225	272	255

表3：兄弟と何語で話すか？（問5）

	北男	北女	南男	南女
國語	81	157	54	111
臺灣語	74	18	143	54
國臺兩方	58	44	66	83
客家語	6	3	2	1
その他	2	3	7	6
〈合計〉	221	225	272	255

表1から表4を見て、次のようなことがわかる。

表4：両親や祖父母と話す時、言語上の理由から意志疎通の上で困難を感じたことがあるか？（問6）

	北男	北女	南男	南女
ある	31	96	37	111
ない	190	129	235	144
〈合計〉	221	225	272	255

- A：表1から、両親と話す時には北部女子の場合は國語を使う者が多く、それ以外は臺灣語を使う者が多いことがわかる。特に南部男子の間では臺灣語を使う者が國語を使う者よりずっと多い。
- B：表2から、祖父母と話す言葉は南北・男女を問わず圧倒的に臺灣語が多いということがわかる。平均してみると、祖父母と臺灣語で話す者は全體の約75%、國語で話す者は全體の約10%となる。この比率は人口全體に占める福建系本省人の割合と外省人の割合にはほぼ一致する。
- C：表3から、南部男子を除いて、兄弟とは國語で話すという者が臺灣語で話すという者より多いことがわかる。興味深いことに、両親と臺灣語で話していても兄弟となると國語で話すという者がかなりいることである。南部男子だけは臺灣語を使う者が多いが、それでも両親と話す場合に比べると國語を使う割合が増えている。
- D：表4から、両親や祖父母と話す時、意志疎通の上で困難を感じた事が「ある」と答えた者は女子に多く、男子には比較的少ないことがわかる。「どんな時に困難を感じるか」という質問に對しては「臺灣語の語彙の中に聞いてわからないものがある」「國語で言えても臺灣語で表現できない言葉がある」という答えがほとんどであった。

さて以上のことをまとめると、學生たちの祖父母の世代（60～70代）、両親の世代（40～50代）、兄弟の世代＝同世代（10～20代）と、使う言語の比率がそれぞれ異なってくるということだ。祖父母の世代は、外省人を除いて青少年期を日本統治時代に過した世代である。日本語と臺灣語（或いは客家語、先住民語）はできるが、國語は苦手だという人が多い。

両親たちの世代は國語政策の下で教育を受けた世代である。自分たちの両親とは臺灣語で話すため臺灣語は自由に操れるが、小學生の時から學校で國語を

話すことが強要され、臺灣語に對して偏見を植えつけられている。両親とも純粹な本省人であるのに子供と臺灣語で話さず國語を用いる家庭があるのは、國語を話すことのほうが高尚だという意識、臺灣語に對する劣等感の反映である。

學生たちの世代はこうした両親に育てられた世代である。両親は國語、臺灣語どちらも使いこなせるわけだが、家庭によりその使用度は異なる。しかし學校ではやはり國語を話すことが主となっているわけで、年齢も近く、共に學生として同じような生活をしてきた兄弟たちとは國語で話すことが多くなる。

もちろんこれは一般的な傾向を述べたのであり、その程度は地域、男女により大きく異なる。南部は北部より、男子は女子より臺灣語を用いる者が多い。即ち南部男子は家庭内で臺灣語を用いる者の割合が最も多く、北部女子は國語を用いる者の割合が最も多い。

なお、この項は「家庭内で」という見出しをつけたが、核家族化の進んだ現在祖父母とは一緒に住んでいないという家庭が多い。そのことも若者たちの臺灣語力低下の一因となっている。

4-1-2 學校内で

表5：學校で同級生と何語で話すか？（問7～10）

(1) 親しい同性の場合

	北男	北女	南男	南女
國語	101	190	60	178
臺灣語	73	8	146	26
國臺兩方	47	27	66	51
〈合計〉	221	225	272	255

(2) 親しい異性の場合

	北男	北女	南男	南女
國語	174	197	145	189
臺灣語	13	7	79	25
國臺兩方	34	21	48	41
〈合計〉	221	225	272	255

(3) なじみの薄い同性の場合

	北男	北女	南男	南女
國語	188	223	184	248
臺灣語	16	—	53	1
國臺兩方	17	2	35	6
〈合計〉	221	225	272	255

(4)なじみの薄い異性の場合

	北男	北女	南男	南女
國語	200	222	233	248
臺灣語	5	—	16	2
國臺兩方	16	3	32	5
〈合計〉	221	225	272	255

上記の表を見て次のことがわかる。

- A：(1)の表から、親しい同性の同級生と話す場合、男子は女子に比べ臺灣語を使う者が多いことがわかる。特に、南部男子には臺灣語を使う者が國語を使う者よりずっと多い。一方、女子の場合は國語を使う者が臺灣語を使う者より断然多い。
- B：(2)の表を見ると、異性の同級生と話す時には男子も國語を使う者が多くなることがわかる。特に南部男子は、(1)の場合とは反対に國語を使う者のほうが臺灣語を使う者よりも多くなる。
- C：これら四つの表を順に見ていくと、南北・男女いずれも(1)→(2)→(3)→(4)と、自分との関係が疎遠な人になるにつれて臺灣語の使用率が減り、國語を使うことが多くなるということがわかる。

4-1-3 町中で

表6：近所の人と何語で話すか？（問11）

	北男	北女	南男	南女
國語	78	144	62	100
臺灣語	94	50	158	104
國臺兩方	48	29	45	48
その他 ⁴³	1	2	7	3
〈合計〉	221	225	272	255

表7: 店で買い物するとき何語で話すか? (問12)⁴⁴

(1)デパート, スーパー, コンビニなどで

	北男	北女	南男	南女
國語	195	222	237	250
臺灣語	5	—	17	1
國臺兩方	21	3	18	4
〈合計〉	221	225	272	255

(2)市場, 屋臺, 普通の店で

	北男	北女	南男	南女
國語	99	152	125	150
臺灣語	82	47	115	78
國臺兩方	40	26	32	27
〈合計〉	221	225	272	255

以上の表から, 次のことがわかる。

A: 表6から, 近所の人と話す言葉は北部女子では國語が多く, 南部男子では臺灣語が多いことがわかる。北部男子では國語より臺灣語のほうがやや多く, 南部女子では國語・臺灣語が約半々である。全體として見ると, 國語を使う割合と臺灣語を使う割合はほぼ同程度と言える。

B: 表7から, デパート, スーパー, コンビニエンスストアなどの近代的な店では, 南北・男女を問わず國語を用いる者が圧倒的に多いことがわかる。また, 市場, 屋臺, 普通の店となると臺灣語を使うが増えるが, やはり國語を使う者のほうが多いことがわかる。

表7の(2)の結果は筆者にとって意外であった。「高雄で買い物する時には, 臺灣語を話すと値段を負けてもらえ, 國語を話すと値段がつりあがる」と言われるほど, 臺灣南部の市場や屋臺では臺灣語を話すのが當然という雰囲気があるからである。しかし, この調査によると南部でも若者には國語を話す者が多いということになる。また表6の近所の人と話す言葉も, 全體的に臺灣語が多いだろうと予測していたのが, 結果は國語・臺灣語がほぼ半々であった。

4-1-4 その他の國語と臺灣語の使い分け状況

「その他, どんな時に國語を話し, どんな時に臺灣語を話すか? (問13)」,

自由に書かせた。主なものをまとめると、以下ようになる。

1 國語を話す時	2 臺灣語を話す時
<ul style="list-style-type: none"> 初めて會った人と話す時 改まった場面で 説明や報告、スピーチをする時 外省人と話す時 高級な、上品な雰囲気のある場所で 授業中や、先生と話す時 自分が高學歷であることを示したい時 女の子とデートする時（男子から） 	<ul style="list-style-type: none"> よく知っている人、親しい人と話す時 くつろいだ雰囲気、言いたいことを言える時 喧嘩する時や怒った時、汚い言葉を言う時 老人と話す時 店でものを値切るとき 田舎の人と話す時 相手との心理的距離を縮めたい時 相手が臺灣語で話してきた時

4-2 若者たちの臺灣語力

表8：臺灣語を聞き取る力はどのくらいか？（問14）

	北男	北女	南男	南女
1 ほとんど全部聞き取れる	178	107	224	149
2 普通の日常會話ならわかるが、難しい ことになるとわからない	34	96	43	98
3 簡単なことしかわからない	6	21	3	8
4 全然わからない	3	1	2	—
〈合計〉	221	225	272	255

表9：臺灣語を話す力はどのくらいか？（問15）

	北男	北女	南男	南女
1 國語同様、言いたいことはなんでも言える	133	30	160	70
2 日常會話には困らないが、難しいこと になると言えない	67	125	96	152
3 あまり上手に話せない	17	65	14	32
4 全然話せない	4	5	2	1
〈合計〉	221	225	272	255

自己評價なので主観的なものではあるが、以上二つの表から臺灣語力については相対的に男子は高く、女子は低いということがわかる。特に男子は北部南部とも、表8では1を選んだ者が全体の八割、表9でも1を選んだ者が全体の六割を占めている。男子は北部も南部も、共に臺灣語を自由に使いこなせる者が多いということである。

一方女子は、聞き取りや日常會話はできても、難しいこととなると話せないという者が多い。南部女子で臺灣語で何でも自由に話せる者（表9で1を選んだ者）は約27%、北部女子になると約13%と少ない。

なお表8及び表9で、3や4を選んだ者、即ち臺灣語があまりできない者は外省人や客家人、先住民ばかりではない⁴⁴。福建系本省人でも3や4を選んでいる人が少なからずいる。そういう人たちの家庭内での言語状況を見てみると、ほとんどが両親と國語で話していることがわかる。

さて、聞き取る力（問14）について2を選んだ者に對して、どんなところがわからないか質問したが、その結果はスラング（俚語）と成語という答えが壓倒的に多く、その他日常生活であまり使わない言葉（例として、キリン・虹・シャベルなど）、専門用語（特に政治關係の）、形容詞と續く。

また、話す力（問15）について2を選んだ者に對して、どんなことが話せないか質問したが、その結果は聞き取りでわからないものと共通するほか、固い話、國語から直譯できない表現、外來語、上品な言葉遣いなどが舉がった。

4-3 若者たちの臺灣語に對する意識

4-3-1 國語・臺灣語に對する愛着度

表10：國語と臺灣語、どちらが好きか？（問16）

	北男	北女	南男	南女
國語	29	57	24	46
臺灣語	34	8	65	20
どちらも好き	158	160	183	189
〈合計〉	221	225	272	255

この表から、國語・臺灣語どちらも好きだと言う者が、南北・男女共通して壓倒的に多いことがわかる。また、國語が好きな者は女子に多く（特に北部の）、臺灣語が好きな者は男子（特に南部の）に多い。

國語が好きだと言う者の主な理由としては、「話し慣れていて、言いたいことをなんでも表現できる」「國語を話したほうが上品な感じがする。臺灣語は粗野で品がない」「國語は習いやすい言葉で、臺灣語のように難しくはない」などが挙げられている。また、「國語こそ本省人・外省人・客家人・先住民をつなぐコミュニケーションの道具だから」という理由もあった。

臺灣語が好きだという者の理由としては「親しみを感じさせるから」というものと、「母語であるから」「臺灣文化の象徴であるから」というものがほとんどである。

どちらも好きだという者の理由としては、「それぞれに特長がある。國語は禮儀正しく、臺灣語は親しみを感じさせる」というのが最も多い。その他、「どちらも自由に話せるから」「どちらも母語だから」と續く。

ところでアンケート実施中に気付いたことだが、この「國語と臺灣語どちらが好きか」という質問に、學生たちは戸惑っていたようである。それは「どちらもごく自然に話している言葉なので、今までそんなこと考えたこともない」ということからきていた。實際「どちらも好きだ」を選びながらも、「言語はコミュニケーションの道具にすぎないのだから、好きも嫌いもない」と書いていた者が数名いた。また「國語と臺灣語とはそれぞれ場面に應じて使い分けがあり、足りないところを補い合っているのだ」「手と足の関係のように切り放せない存在だ」と書いている者もいた。

このことからわかることは、今の若者たちにとって國語と臺灣語とは、先に4-1-4でも見たように、生活の中で場面や状況に應じて使い分けがされているのだということである。「どちらも好きだ」という者が壓倒的に多く、そしてその理由の多数が「國語は禮儀正しく、臺灣語は親しみを感じさせるから」というのも、このことを裏付けている。

なお、臺灣語が苦手（問14・15で、3や4を選んでいる者）であるにもかかわらず、「どちらも好きだ」を選んでいた者が多かったことを特記しておきたい。

4-3-2 國語政策に對して抱いた感想

「小學生時代、臺灣語を話して先生から罰を受けたことがあるか？（「ある」と答えた人に對し）どんな罰を受けたか？その時どう感じたか？（問17）」と

質問した。

「罰を受けたことがあるか」という質問に対しては、全體として約三割の學生が「ある」と答えていた⁹⁹。また「どんな罰を受けたか」という質問に対しては、「罰金（金額は1元・5元・10元と、學校によって異なる）」という答えが最も多く、その他「體罰（“打手心”¹⁰⁰、立たされたなど）」「“請說國語”と書いた札を首に掛けられた」「“我要說國語”とノートに100回書かされた」「口にガムテープを貼られ、一定時間内話すことを禁じられた」「操行面の成績を減點された」などとなっている。

「罰を受けた時、どう感じたか」という質問に対しての答えは二つに大別できる。

第一の答えは「腹が立った」という類いのものである。「兩親が話している言葉を話してなぜいけないのか」「どうしてこんな規則があるのか理由がわからない」などと怒りを感じたというものである。この種の答えが全體の約七割を占める。

第二の答えは「子供だったので何とも思わず、素直に罰を受けた」というものである。その中には「臺灣語を話すことはいけないことなのだ、以後注意しよう」と反省したというものも含まれる¹⁰¹。

この後者の答えこそ、正に國民黨政府の國語政策の眞髓を表わしていると言える。幼い純眞な頃に「臺灣語を話すのはいけないことだ」という意識を植えつけることにより、四十年にわたって臺灣人の心を縛り續けようとしたのである。しかし、多くの者はそれに反感を抱いていたわけで、その怒りが最近の民主化によって噴出してきたのだと言える。

4-3-3 臺灣語教育の必要性について

表11：小中學校で國語のほかに臺灣語も教えたほうがいいのか？(問18)

	北男	北女	南男	南女
教えたほうがいい	183	193	196	218
教える必要はない	38	32	76	37
〈合計〉	221	225	272	255

この表から、「教えたほうがいい」という意見が多數を占めていることがわかる。細かく見ると「教えたほうがいい」とする者の割合は、臺灣語力の低い

北部女子が最高（86％）で、反対に臺灣語力の高い南部男子が最低（72％）となっている。

「教えたほうがいい」理由としては、「母語だから」「臺灣文化を、次の世代に伝える義務がある」「民族の滅亡は言葉から始まる」といった民族主義的立場からのものが多い。また「もっと臺灣語が上手になりたいから」という理由も特に女子から挙げられている。臺灣語が苦手な女子たちの中にも、臺灣語を習いたがっている者が多いのだ。

その他、「言葉はたくさんできたほうがいい。世界が広がるし、役に立つ」「現在臺灣語は言葉の亂れが激しいので、國語のように規範を確立すべきだ」「臺灣語ができないと馬鹿にされたり、疎外されたりすることがある（外省人二名から）」などの理由があった。

一方「教える必要はない」という理由としては、「みんな話せるのだから、わざわざ学校の科目にする必要はない。家庭内で自然に覚えればそれで十分だ」という意見が多い（特に南部男子に多い）。また「臺灣語は日常生活語にすぎない、現在の社會に適應できなくなっている」「臺灣語は難しいし、文字もない⁹⁹。教えられる人材もないし、適当な教材もない」という理由もある。

この他、客家人を中心に「客家人・先住民もいるのに臺灣語だけ教えるのはおかしい。教えるとしても國語を第一とし、選擇科目とするべきだ」という意見が出されていた。

4-3-4 臺灣語の將來について

最後に「臺灣語の將來の地位についてどう思うか？（問19）」と問い、自由に意見を書かせた。

多かったものは、まず「ますます重要になっていく」というものである。「重要になっていき、やがて國語と同等の地位になる」「國語の地位には及ばないが、臺灣の中で大きな地位を占める」という見方をしている者が多い¹⁰⁰。また「主動的地位を占めていくであろうが缺點も多いので、國語の補助が必要だ」という意見もあった。

もう一つ多かった意見は、「臺灣文化の傳統を伝えるため、努力して守っていかなければならない」というものである。「飲水思源」「不要忘本」という言

葉を用いてそのことを述べている者が多い。

また「今と変わらない」「没落していくだろう」という意見は、全體としては少数ではあったが、特に北部女子を中心に出不されていた。

なお、注意しなければならないのは主に客家人、先住民を中心に出不された次のような意見である。「臺灣には臺灣語以外に他の言語もある。臺灣語ばかりを必要以上に強調すると、以前の國語政策と同じく、他の言語や文化を壓迫することになる。臺灣語の普及に力を入れるのはいいが、それを強制するようになってはいけない」

臺灣語はこれまで國語によって抑壓されてきたが、最近臺灣語の權利が徐々に高まるにつれて、臺灣語自身が客家語や先住民語を抑壓してきたのだという事実が明らかになってきた。客家人にとって今日客家語を話せない若者の問題（ひいては客家文化喪失の問題）は、臺灣語を話せない若者の問題以上に深刻な問題となっているのである。

従來の國語政策に對する反動から、臺灣語や臺灣文化を強調する人の中には過激な「臺灣民族主義」を主張する者がいる。學生たちの意見の中にも「臺灣人は今後みんなが臺灣語を話せるようにならなくてはならない」というものがあつた。しかし「臺灣の文化＝福建系臺灣人の文化」なのではない。この點に注意していくことが今後臺灣語復權運動の中で大切であらう。

5. 結び

本稿では臺灣語が下手になったと言われる最近の臺灣の若者たちが、本當に臺灣語の復權を望んでいるのかということをは明らかにしようとした。そのためアンケートを実施し、彼らの日常での言語使用状況、臺灣語力、臺灣語に對する意識について調査した。集計にあたっては南北・男女別に統計をとった。この調査を通じ、次のようなことがわかつた。

臺灣語の使用状況については、北部より南部において、また女子より男子によって使用される割合が大きい。しかし、現在の若者たちの間で國語と臺灣語はどちらも言語生活の中で重要な役割を擔っており、場面に應じてそれぞれの言語を使い分けるという現象が生まれている。即ち、國語は丁寧さを、臺灣語は親しみを必要とする場面で用いられる。

臺灣語の運用能力に関しては男子は高く、女子（特に北部の）は低くなっている。しかし臺灣語に愛着を感じる者は多く、臺灣語力の弱くなっている者（北部女子）ほど、臺灣語を習いたがっており、小中学校での臺灣語教育の実施を望むという傾向にある。

現在臺灣語に對する意識は若者たちの間にも高まっていると言える。臺灣語は「母語」、自分たちの「文化の源」であるのだから、大切に守っていこうという意識が生じているのである。もっとも臺灣語を強調しすぎることにより、客家人や先住民などを抑壓することのないよう注意しなければならないが。

注

- (1) 専科學校には二年制と五年制とがある。二年制は日本の短期大學に相當し、五年制は高等專門學校に相當する。
- (2) 本稿では、臺灣で公用語として定められている北京官話「guóyǔ」を「國語」とし、一般的な意味での「こくご」は「国語」と表記して、區別して用いる。
- (3) 臺北のヤミ煙草取締まりをめぐる民衆と專賣局職員との衝突をきっかけにしておこった、全國的規模での臺灣人の反亂。臺灣人は一時的に全島を自主管理下におさめたが、國民黨の反撃に遭い、五千とも二萬ともいわれる數の臺灣人が虐殺された。
- (4) 既にいくつかの小學校では臺灣語の授業が始められている。しかし、それは臺灣語を教えてもかまわないという政府の許可の下で、各學校の校長が獨自の判断で行なっているにすぎない。そのため、體系だった臺灣語の教育が行なわれていくわけではない。
- (5) 實施した學校は北部では東吳、輔仁、淡江、政治の四大學及び景文工商、龍華工商の二專科學校である。このうち龍華工商だけが桃園にあり、それ以外は全て臺北にある。南部では高雄師範、中山、成功の三大學及び東方工商、高苑工商、文藻外國語文の三專科學校である。このうち成功大だけが臺南にあり、他はみな高雄にある。なお專科學校の中で龍華工商だけが二年制で、他はみな五年制である。
- (6) 即ち南部に屬するのは嘉義市／縣、臺南市／縣、高雄市／縣、屏東縣、臺東縣であり、それ以外の地域はすべて北部とする。
- (7) 「客家人」は「本省人」の一部なので、「本省人・客家人」と並列することは本来おかしいことである。しかし、客家人以外の本省人、すなわち福建系の本省人を指す呼稱が一般的な言葉としては見当たらない。（「福建人」「福佬」「閩屬」などの呼稱があるにはあるが、みな學問的な呼稱であり一般には用いない。）そこでここでは「客家人」を並列することによって、「本省人」が福建系の本省人を指していることを示すことにした。

- (8) 問1は「父と何語で話すか」、問2は「母と何語で話すか」であり、「國語、臺灣語、客家語、その他」の中から選ばせた。この表はこの二問の解答を合わせて集計したものである。
- (9) 「父とは臺灣語、母とは國語で話す」「父とは國語だけだが、母とは國、臺兩方とも用いる」など、多岐にわたる。
- (10) 客家語話者の場合、家庭内での言語使用が國語、臺灣語、客家語と多岐に渡るため、細かく分類しようとするとは非常に複雑になってしまう。それに少数でもあるため、父母のどちらか一方と客家語で話すと答えた者は全て一括して5の客家語に分類した。
- (11) 父方の祖父母と、母方の祖父母とで違う言語を用いるという人が少なくないので、アンケートの質問では父方(問3)と母方(問4)の二つに分けた。この表はそのうちの父方(問3)の方の表である。母方の方の集計結果も數字的にはほとんどこれと同じなので、問4についての表は割愛する。
- (12) 「その他」には先住民語の他、廣東語・山東語・雲南語など中國の諸方言及び、無記述(祖父母がいない)も含む。
- (13) 客家語、先住民語など。また「近所の人と全然話したことがない」という者も數名いた。
- (14) この質問を(1)、(2)と分けたのは、アンケート作成のための豫備調査をしている段階で學生から、店の種類によって話す言葉が変わるから一概には答えられないという聲が出たためである。
- (15) むしろ客家人の中には2を選んでいる者が多い。
- (16) この質問の主眼は「どう感じたか?」ということにあるので、罰を受けたことが「ある」か「ない」かについての南北・男女別の表は省略する。
- (17) 學生に兩掌を前に出させ、それを教師が鞭で打つという中國式の體罰。
- (18) この答えは女子に多い。
- (19) 2-3で觸れたように、現在臺灣語(及び客家語、先住民語)を教えることが計劃されているが、最大の課題は表記法の確立である。
- (20) 「やがて國語にとってかわり、臺灣語が國語となる」という意見もあったが少數であった。

〈参考文献〉

樋口靖 『臺灣語會話』東方書店 1992年

「國語と臺灣語」(『アジア讀本 臺灣』河出書房新社 1995年)

松永正義他 『臺灣百科』大修館書店 1990年

若林正丈他 『激動のなかの臺灣—その變容と轉成』田畑書店 1992年